

一 二河喩の顕すもの

稲 葉 秀 賢

一

近年世界的傾向として自殺率が上昇していることが問題とせられている。このことは日本にあっても同様であって、殊に若年層の自殺が増加していることは、憂慮すべき現象といわねばならない。

自殺は自己破壊行為であるから、それ自体は個人の精神的問題であるが、こうした自己破壊的行為は偶然的に起るものではなく、それを誘発する社会環境に基くことを忘れてはならない。それ故に自殺は個人の精神的問題であると共に、社会的な病理現象であるといわねばならない。現代社会が持つ矛盾や欠陥が社会生活の中で弱い部分に吹き出し、或は若年層、或は管理職層、或は老年層の自殺となってくるのである。例へば若年層に於ける家出、登校拒否、受験失敗など、それは個人的な問題の如く見えつつ、その背景には深い社会的病理が横わっていることを忘れてはならない。こうした社会的病理に悩む現代は、不安の時代、混迷の時代と呼ばれている。その病源は何処にあるのであろうか。

単に自殺という現象のみを捉えてみるならば、そこには国家の政治態勢、国民性、先進国後進国と呼ばれる文化程度の相違、気候風土等の凡ゆる社会現象がかかわって、それだけでは解明できない複雑な要因があるに違いない。け

れどもこれらの複雑な社会現象の底に流れているもの、それが現代社会の特質であって、それは現代人が自己の依るべき真実のものを見失っていることに帰するのではないであらうか。

近代文化はたしかに我々の生活を外面的に向上させたに違いない。然し巨大な機械文明の発達は人間すらも機械化して、却って人間は人間としての生き甲斐を喪失したのである。そこに不安と昏迷の原因がある。文化が花やかであればあるほど、精神的虚しさがわれわれを不安と昏迷に追いやったのである。この精神的な虚しさは、如何なる物質的文化の恩恵を以てしても満すことのできぬものである。そして自殺する人はこうした人生の虚しさと淋しさに堪え得ないで、遂に自己破壊に走るのである。こうした人間の虚しさは、如何にわれわれの社会体制が変化しても、それに依って満されるようなものではない。従って、現代の昏迷と不安を将来した根本には人間の生き方の問題があるのであって、人間の生き方という原点に立ち返らねばならない。こうした意味で二河諭は人間の生き方に於ける原点を示すものではないだろうか。

一一

思うに二河諭は単なる譬喩ではなく、善導自身の体験であろう。彼の内心に燃えるひたすらな求道心の体験内容をさながらに象徴せるものである。それ故に、「一切の往生人等に白さく」と云い、「行者の為に」といっても、この譬喩に於いて彼が顕さんとするものは、「信心を守護する」ということであらわされる彼自身の信体験に外ならない。それは善導の信体験でありつつ、同時に一切の往生人、或は行者といわれる求道者の道であらねばならぬ。人生の虚しさが内面化せられるとき、その虚しさの壁を破って流れ込む光こそ、われわれの最後の依拠であり、こうした帰依の場所を見失ったところに現代の昏迷と不安があったといったら云い過ぎであらうか。

そしてこの譬喩は、「人あり」という一語から説き始められる。まことに人ありという人間存在の自覚、そこから

凡ゆる問題が生起するのである。然もその人は常に単独である。人の数は多い。けれども数が多ければ多い程、人は単独者としての孤独を感じずにはいられない。殊に、心の触れ合いといった人間の原点が忘れられた現代にあっては、群集のなかの孤独が沁々と実感されずにはいない。そしてこの単独者の孤独をまぎらす為に、人は愈々混沌と不安のなかに身を投ずることとなる。かくて真に人間の依るべき真実を見失っているのが特に現代の姿ではないであろうか。このことは逆に云えば、人が真実に依るべきものを模索している姿といってもいいであろう。ここに願生道の現代的意味が見出されねばならない。

思うに二河喩は善導自らの体験の表白であると共に、人間生活の原点を象徴的に語れるものである。然し譬喩そのものは必ず依るところがあるのであって、開悟院師はこれを喩依と喩体ということであらわしている。その喩依とは『涅槃経』（北本・二三・六）であることは否むことができない。何故ならば『涅槃経』に説くところと善導の二河譬との間には頗る相似たものがあるからであって、例へば四正の毒蛇を以て四大に譬え、五旃陀羅を以て五蘊に、六大賊を六境に譬うるなどはその例である。勿論善導は『観経疏』のなかで、殊に廻向発願心の下でこの譬喩を出していることから、それが『観経』の義に基くことは否むことができないけれども、喩依としてはまず第一に『涅槃経』を挙げなければならぬ。その他類似的譬喩は『大論』、『法華経』「譬喩品」、『安楽集』などが先徳に依って指摘せられている。更に喩体が『観経』の三心であることは、三心の下にこの譬喩が出されていることから否むことができない。ただ古来これを三心の総喩とするか、或は回向発願心の別喩とするかに就いては諸説区々であるけれども、譬喩が信心を守護する為と云い、「二尊之意に信順して」等といっていることから、三即一の深心であることは否むことができないであろう。殊に宗祖が『愚禿鈔』下十五
左

「此の深信に就いて、一譬喩、二異、二別、一問答、二廻向有り」と標して、

「一譬喩とは此の心深信すること金剛の如しとなり」と云い、更に

「一問答に就いて、六悪、六譬 乃至 二必有り」

とし、六譬とはと標して、その第六に「二河なり」と説かれている。されば二河譬は明かに深信の譬とすべきである。然るに善導はこの譬喩を廻願心の下に出し、宗祖もまた欲生積の下に引用せられたのは何故であろうか。蓋し、この譬喩は聖道の外邪異見に対し信心を守護する為のものであるから、聖浄二門相對の所明であって、それ故にこそ信心を出すに願往生心を以てせられたのである。願往生心は願生浄土の信心に外ならぬのであって、二河喩が人間の眞実なる生き方をあらわすことを忘れてはならない。

願生浄土ということは、ともすれば我々の現実意識と遊離せるが如くに見える。我々の現実意識からすれば、浄土は理想の世界と考えられ、理想の世界なれば、それを現実のなかに実現すべきであろう。浄土は現実の世界に建設せられるべきであって、徒らに彼岸的世界として願生するというが如きは、いやしくも生ける現実を問題とするものにとって、観念的夢想に過ぎぬようにさえ思われる。

然し、現実に浄土を建設するということは現実的である如くに見えて、極めて観念的な意識であることを思わずにいられない。何故なら深い現実意識は深刻な人生の事実を知らしめるものであって、眞に現実意識に醒めたものは、却って彼岸の世界としての浄土を願わずにはいられぬのである。その深刻な人生の事実、それが水火二河なのである。この二河は深くして底なく南北に辺りなく広がるのであって、それを自覚した現実意識に於いて、我々は如何にして此土に浄土を建設するというのが如き夢想に安んずることができ得るであろうか。然して二河の闊さ百歩とあって、それは人壽百歳に譬えるとあるから、人生その者の真相をあらわすことを示すのである。まことに深い現実意識にあっては、貪欲の深さ底なく、その広りもまた極りなく、見るもの聞くもの凡て貪欲の対象とならぬものはない。まことに

限りなく落ちてゆくほかなき欲望の世界である。人はこの欲望の故に限りなく争うのであって、物が豊かになればなるほど、その争いは益々冷酷とならざるを得ない。又火の河に象徴される瞋恚の世界もわれわれの深い現実意識にあるのは限りなく深く、限りなく広がる苦悩の世界である。人間は何故にかくも深く愛憎のところに縛られるのであるか。問うても答えのない人間の悲しみ、それは徒らに食るな、徒らに憎むなという如き道德意識を以てしてもどうにもならぬ無底の深淵である。この深淵に立つて誰か彼岸の浄土を願わずにいられるであろうか。願生浄土こそ、最も深い現実意識であらねばならない。

かくの如く無底の深淵に立つ現実意識にあっては、愈々深く往生浄土の願いを発起せずにはいらねぬのである。「正しく水火の中間に一つの白道あり」ということは、限りなく深い現実意識に於いてのみ見出される白道である。自殺者は人生的虚しさの壁にたぢろぎ、遂に自己破壊という逃避の道を選ぶのであるが、真実に現実意識に立つものは、その壁がどんなに堅固であっても、それから逃避してはならない。自殺を人生からの逃避の道ときめつけることは自殺者の心理を知らぬものといわれるかも知れない。けれども人生の矛盾と不安に悩む現実意識にあっては、自殺はその矛盾と不安の解決にならぬのであって、矛盾と不安の現実が深かければ深い程、却ってその不安と矛盾の中に道を見出さねばならぬ。そして常に道はあるのである。ただその道は狭少であって、その闊さ四五寸に過ぎない。狭いけれども、その道は「東の岸より西の岸に到る」「長さ百歩」の道であるということは、我々の一生を通じて、願生浄土の道が開かれているということである。まことに人間の一生は西に向って行く道であり、その西とは帰依の方向であり、人生の矛盾と不安を解消する涅槃の世界である。必ず涅槃に到る道は常に開かれているのである。然もその白道は「衆生貪瞋煩惱中に能く清淨願往生心を生ぜしむ」と云われる如く、深い現実意識の中に見出される白道でなければならぬ。誠に「中間に白道あり」という善導の指示は我々の現存在を底からゆり動かすようなひびきを与える。人生の矛盾と不安をなくするのではなく、矛盾と不安のなかに白道が見出されるのである。その白道とは、宗

祖によれば

「能生清淨願往生心と言は、無上の信心、金剛の真心を發起するなり、これ如来廻向の信樂なり」と示された。まことに本願を信樂し、如来の願心に生かされることが、人生の白道なのである。然らばその白道は如何にして開かれるのであろうか。

三

「人有って西に向って行かんと欲するに」「忽然として中路に二河あり」ということは、まさに善導の現実意識をあらわすものである。少欲知足と教えられ、知足第一富と説かれても貪らずにいられないわが身、憎むということは悪と知りながら憎まずにいられない現実の矛盾、然もその矛盾は限りない広がり、底のない深さをもって、我が現実意識を苛むのである。この矛盾と不安は外から来るものではなく、わが身に即したものである。二河喩にあつては、行人の単独なるを見て、「多くの群賊悪獸あつて」、「競い來つて殺さんと欲す」と説かれている。譬のなかで云えば、行人の外に群賊悪獸があるが如く思われる。然し、「群賊悪獸詐り親しむというは、即ち衆生の六根、六識、六塵、五蘊、四大に譬うるなり」と説かれている。我々は人生の矛盾と不安が他から將來せられる如く考えている。それ故に、政治が悪いと云い、社会が悪いと云って、政治や社会の構成によって、その矛盾が解決するが如き過誤を冒している。けれども、どれだけ政治が革つても、また社会組織が變つても、人間自身が持つ矛盾がある限り、その矛盾が解決せられるはずはない。貪愛瞋憎の悩みは外から来る悩みでなく、四大五蘊の身に即して、六根、六識から生ずるのである。然も我々は六根六識に詐り親しんで、人生の虚しさを忘れ、徒らに一生を空過するのである。そして死に逼られて愕然として恐れおののくのである。ここに人は死の怖しさに追われて、直ちに西に向わんとするのであるが、その時、ただ便りになるものは「諸々の行業を廻して」という功德善根である。然しその功德善根は水火二河の前に

立って、ひとつも便りになるものではない。何故なら、貪愛瞋憎の心は凡ゆる法財を焼き尽すからである。かくて前面に道を遮るものは、貪欲と瞋恚の二の河である。死に直面し、水火二河にはばまれてわれらは如何にすべきであろうか。

譬喩はここで行者の念言と恐怖を如何にも現実意識に即してあらわしている。即ち前に進まんとすれば、中間の白道は極めて狭少であって、「今日定めて死せんこと疑わず」と白道を行くことの苦難を悟るのである。まことにわれらの前途に横わるものは、貪愛瞋憎の悩みであって、生きることは貪ることであり、邪魔者を憎み、争うほかに現実はないといってもいい。その中に、水火に溺れず、焼かれない白道を歩むことは、全く不可能のことであって、行くも死と云わるゝ所以である。

また「到り回らんと欲せば、群賊悪獣漸々に来り逼む」るのである。即ち人生に退却はあり得ない。生れざりせばと歎じてみても、自らの業縁は果さねばならない。それは群賊悪獣に追われて生きるに過ぎない。

更に「南北に避け走らんと欲すれば、悪獣毒虫競い来りて我に向う」のである。たとひ酒色に身をまかせても、内心の虚しさを如何ともすることはできない。逃げようとすればするほど執拗に矛盾と不安が逼り来るのである。まことに、行くも死、止るも死、回るも死であって、如何にすべき、如何にすべきという念は、真摯な求道者が必ずくぐらねばならぬ関門である。元祖法然が報恩蔵にこもって、「われは三学の器にあらず、如何にすべき」と悶え、宗祖が六角堂の参籠から立ち上って、「生死出づべき道」を求めて、百ヶ日照るにも、降るにも法然聖人の許に通いつめられた必死の思いは、まさに二河譬の三定死の関門に立つ姿であったといわねばならない。ここにこそ、真に眼覚めたものの心境がある。一度眼覚めたものは、もはや貪愛瞋憎のなかに安易低徊して、無明長夜の夢を貪ることはできないし、また酒色の誘惑に溺れて、自己を詐することもできない。然も真に目醒めたものの前進を遮るものは水火の二河である。忽然ということはこうした眼覚めをあらわしたものであろう。然し、必ず墮せずにはいられぬ水火二河の

間には、たとえ狭少であっても白道がある。ただその白道は水の貪欲に湿され、瞋恚の猛火に焼かれているのである。覚めたということは、この水火の恐れが愈明かになるということに外ならない。従って白道を行くにしても、果して渡り得るか否か、「惶怖また云うべからず」である。

まことに道を求むるものの惑いは深いのである。然し惑いに低迷する限り、道は開かれない。そこにパスカルが信仰は賭であるといった言葉も想起せられるのであって、今や行者にはひとつの決断があるのみである。

ここに善導は、既に道あり、「必ず度すべし」と決断することを教えている。その決断は自己の決断であるが如く見える。然し決断するには決断せしめるものがあるからであって、そこに直感せられるものが願力の廻向である。何故なら、「道あり、必ず度すべし」という決断は、自己から決断するのではなく、「道あり」というところに、決断が成就するからである。そして、その道が釈迦の發遣と弥陀の招喚によって、明かにせられるのである。決断して二尊の遣喚が聞かれるのではなく、二尊の遣喚を聞く所に決断が成就するのである。それは自力を捨てて他力に帰するただ一たびの廻心である。まことに「信樂を獲得することは、如来選択の願心より發起し、真心を開闡することは大聖矜衷の善巧より顕彰」せられるのである。ここに二河喩が信心を守護するものであることが明かにせられているのであって、善導が「能生清淨願往生心」とあらわしたところにも、能の一字によって他力の願心が示され、清淨願往生心というところに、純粹な願生の信心があらわされていることを思わしめられる。

四

譬喩に「この念を作す時」という時は「既にこの道あり、必ず度すべし」という決断の時である。この時「東岸に忽ちに人の勧むる声を聞くのである。「仁者ただ決定して此の道を尋ねて行け、必ず死の難なけむ、若し住らば即ち死せん」という東岸の声は、「釈迦已に滅して後の人見たてまつらざるも、なほ教法ありて尋ねべきに喩ふ」るもの

である。釈迦の教法は覚えるものでなくて、ただ声として聞くべきものである。教法を覚え、知るものは多いけれども教法を声として、身に聞くものは稀である。教法は常にこの念に相應し、感応して聞えるものである。宗祖は、「聞と言うは仏願の生起本末を聞いて、疑心あることなし」

と聞の一字を解釈せられた。疑心あることなしということは、我々が疑わぬということではない。疑いが無くなるのである。疑がなくなるのは教法の声を聞くからである。声を聞くところに疑心がなくなるのであるから、疑心がなくなるのはひとえに教法の力であらねばならぬ。聞は聞くというよりは、聞えてくるという意味であって、「聞其名号信心歓喜」ということは、釈迦の教法を通して本願のまことが聞えてくるところに信心の喜びがあることをあらわすのである。

聴聞というとき、聴はわれわれの分別心を以て聞くのであり、聞は却って聴を通して聞えてくる声を聞くのである。聴は開けても聞が開けないというところに他力信心の深義があるのであるのではないであろうか。蓋し聞の世界にあっては、決断の力がわれにあるのではなくて、ただ教法の声に信順するところに、決断がある。

かくて、東岸の勸む声に呼応するものが西岸の喚声である。それは共に声として説かれていることを注意せねばならない。声にはひびきがある。真に声を聞くものは、その声のひびきを聞くものでなければならぬ。

「汝一心正念にして直ちに來れ、我よく汝を護らむ、衆て水火の難に墮することを畏れざれ」

という声には「若不生者不取正覚」の大悲願心のひびきがかもっている。このひびきを聞くものは、水火の難を畏れざる真実の決定心を得しめられる。まことに、「西岸上に人ありて喚ぶと言うは、即ち弥陀の願意に喩ふ」ものである。さればこの声は常に第十八願の願意をあらわすものとして、「一心正念」は「至心信樂欲生我国乃至十念」であり、「我能汝護」は「若不生者不取正覚」であると開示せられて來たのである。宗祖が

「西岸上に人ありて喚んで言はく」とは弥陀如来の誓願なり

「一心」の言は眞実の信心なり

「正念」の言は、選択摂取の本願なり、又第一希有の行なり、金剛不壞の心なり

「我」の言は尽十方無碍光如来なり、不可思議光仏なり

「護」の言は、阿弥陀仏果上の正意なり、また摂取不捨を形はず貌なり、則ち是現生護念なり

等と釈せられたのも、まさに西岸の声が如来の願心を示すことを明かにせられたのである。

かくて東岸の声と西岸の声との呼応は、教と法との呼応である。教なくして法は顯れず、法を顯すところに教の意味がある。従つて教を聞いて法を聞かざるものは、声を聞けどもそのひびきを聞かざるものである。ひびきを聞かずに、声を聞いたとは云えないはずである。それ故に教は「此の道を尋ねて行け」と教え、西岸の声はそれに呼応して、「直ちに來れ」と喚び給う。そこに法の眞実がある。然し法の眞実を決定するものは、教であつて、教に教えられ、導かれて、法の眞実を信証する決断が成就するのである。釈迦諸仏というとき釈迦の教は釈迦の独断ではなく、その背後に諸仏の教法があり、諸仏の証誠のあることを教えている。然もその教が帰一するところに弥陀の法があるのであるから、諸仏阿弥陀である。まことに一乗は大乗であり、大乗は誓願一仏乘に極るのであつて、かくの如き教と法の呼応を通して、眞実の信心が成就する遇法の内景を明かにするものが二河譬である。まことに四大五蘊と云わゆる人間の機能は、人生の混沌と不安を産み出す根源であつて、人間生活は如何にしても水火の難を免れることはできない。その現前の事實に覚めた現実意識は、それから逃避することは許されないのであつて、その現実意識のなかに能く清淨願往生心の白道を見出さねばならない。仏法は人間の苦惱をなくする道ではなくて、それを超える智慧の道である。

五

「既に道あり、必ず度すべし」という決断が成就しても、その道は平坦な道ではない。「貪愛瞋憎の雲霧、常に眞実信心の天を覆へり」とあるが如く、その白道は常に水に湿され、火に焼かれるのである。

「既に此に遣はし彼に喚ばふを聞きて、即ち自ら正しく身心に当りて、決定して道を尋ねて、直ちに進んで疑法退心を生ぜず」とあるが如く、彼此遣喚の声を聞くものには、狭き白道はそのまま自然の大道となり、疑法退心の心は消えて、直進の道が開けたのである。にも拘らず、その道は疑わしい。何故なら、此土にあって、人間の機能が働く限り、分別の迷心が揺れ動き、「いかりはらたちそねみねたむこゝろ」は絶えぬからである。その動搖に乗じて、群賊悪獸は更に誘惑の手をさし出し、「仁者かへり来れ、此の道險悪なり、過ぐることを得じ、必ず死せんこと疑はず、我等衆て悪心あつて相向うことなし」と呼び返さんとするのである。

人間は弱いものである。余程のことがない限り、退転なき菩提心を持続することは容易ではない。われわれの現実意識はともすれば無明の闇に彷徨するのである。ここに群賊悪獸とは、「即ち別解別行悪見の人」であつて、それぞれに自らの見解を以て、互に惑亂し、罪を造つて退失せしめるのである。別解別行の人とは、聖淨相對の上で云えば、淨土の教法に対し聖道の修行を説くものである。

凡そ人間は常に汝と對向して生きねばならない。我と汝との對向は、必然的に道を要求し、その道に背く悪と、道に順う善との相剋を免れることはできない。されば人間生活に於ける最も深い現実意識は善悪という道徳意識である。この道徳意識なしに、人間生活はあり得ない。然もその道徳意識にあっては、悪を廃して善を修する行修が最も道にかなうものとして要求せられる、この道徳意識に従う限り、ただ本願を信じ念仏申して仏になる淨土の教は、大きな背理であり、矛盾であるといわねばならない。そこに罪惡深重の身という現実意識が働けば働くほど、往生淨土の信

心に疑法退心を生ぜずにいらない。

更に悪見の人とは、「懦弱、懈怠、邪見、疑心の人なり」と言われるものであって、自らの善に懦るところに、懈怠、疑心を起して、邪見に陥るのである。然もかくの如き悪人は自己の外にあるのではなく、却って自身の内にある。まことに別解別行悪見の人といっても、その人は自身のなかに見出されるものであって、ここに「自ら罪を造りて退失する」ことになるのである。それ故に宗祖は

「群賊とは別解別行異見異執悪見邪心定散自力の心なり」

といつて、惑乱の主体が自らの中にあることを内観せられたのである。

「既に道あり、必ず度るべし」という決断はかくの如き定散自力の心からの脱皮であったはずである。そこに直進して疑法退心のない自然の大道が開かれたはずである。「我信ず」、「我疑はず」という直進の道に立つと意識しながらその意識の底から、定散自力の惑乱が起って直進の方向を見失う危機に迫られる。定散自力の疑心は如何に深く心に横わっているかを思わずにいられない。宗祖が『正像末和讃』に疑惑和讃二十三首を造って

「已上二十三首仏智不思議の弥陀の御ちかひをうたがふつみとがをしらせんとあらはせるなり」と書きつけ、最後の和讃を

「仏智うたかふつみふかし、この心おもひしるならば、くゆるこゝろをむねとして、仏智の不思議をたのむべし」と結ばれた御意も深く身に泌みるのである。

けれども、西岸の本願招喚の勅命を聞けるものには、「我疑はず」という我もなく、ただ本願の大悲願心に満たされて、疑心退心の入り込む余地はないのである。それを宗祖は、

「信心といふは、如来の御ちかひをきゝて、うたかふこゝろのなきなり」

と釈せられた。疑わぬのではなくて、疑う余地がないのである。そこに得生の喜びがある。然もその得生の想は、金

剛の如くして破壊せられることがない。されば得生の人は

「一心に直ちに進んで道を念じて行けば、須臾にして即ち西岸に到り、永く諸難を離れ、善友相見て慶樂すること
已むことなし」

とあらはざるゝのである。されば願生浄土の白道は平坦ではない。常に惑乱の悔険にさらされているのである。けれども、仏智疑う罪の深さ、惑乱の根元である定散自力の心の根強さに覺めて、悔ゆる心を旨として、不思議の仏智をたのむところに、險惡の道がそのまま平坦の道に転ずるのである。

「仰いで釈迦発遣して指へて西方に向はしめたまふことを蒙り、又弥陀の悲心招喚したまふによって、今二尊の意に信順して水火二河を顧みず、念々に違ることなく、彼の願力の道に乗じて、捨命已後彼の国に生ずるを得て、仏と相見て慶樂すること何ぞ極らん」

という願生の信心を明かにする所に二河白道の譬喩の深旨があった。まことに東岸より西岸に通ずる四大五蘊の白道が、そのまま彼岸に到る願力の道であるということは、何という仏智の不思議であろうか。されば、四大五蘊の苦難は常に願力に護られて、慶樂の道となるのであって、そこに願生の信心の内景が具体的に示されるのである。

「既に道あり、必ず度るべし」といふ決断は、釈迦の教と弥陀の法の呼応のなかに成就するのである。「仏法は聴聞にきはまることなり」といふ蓮如上人の言葉がひしひしと思わずにいられない。四大五蘊の白道がそのまま彼岸の願力道であるということこそ、我々の生き方を決定するただひと筋の道であって、この道を行くほかに人生はないのである。与えられた業縁の道がそのまま願力に乗じてゆく道であるということは、何という不可思議であろうか。道は常に開かれている。開かれている道に眼を閉じて、流転の道を彷徨うてはならない。深い現実意識に立って、開かれた白道を行くところに、如何なる現実の苦難も忍受せられ、究竟の帰依の世界に導かれて、光明の広海に浮ぶ喜びが与えられるのである。二河の喩は単なる喩ではなくて、現に我々の行く帰依の道を教えるものといわねばならない。